

カウンタダウンが始まる

「ここまで来たら設立するしかない。だが、その成否は総会にかかっている。押し気味ではあったが、事前の準備は整った。今日は「れま」までに募った会員各位への議案発送大会である。当センターが得意とするIT系やりとりで以って、議案はwebから、出欠届もEメール等で、というのも一応案内はしてあるのだが、何せ設立総会である。現物主義で確実に、となると、紙なりハガキなりが物を言う。発送件数はそれほどではないものの、資料のポリウラムがそれなりなもんだから、出て来られる役員・委員は総出、かつ朝からバタバタ。

この際、rigata関係者にも手伝わってもらいたいところだったが、舞恵は年度末が近いこともあり、自主的に休出、八広は冬木と打合せだか何だかで揃わない。第三土曜日なので、本来なら第三の男が来て然るべきではあったが、お嬢さんのアタックが利き過ぎたか、ご欠席。

「ま、業平さんは仕方ないわね。でも、弥生嬢は？ 召集かけといたんだけど」

「ケータイかけてみたらどうですか？」

ライバル関係にある二人ゆえ、あまりお勧めできる話じゃなかった？ 櫻は言うてから気が付くも、

「そっか、かけてみよ」

あっさり受け容れられてしまったので、キョトンである。文花がピピとやり出すと、その通話先の女性がタイミングよく入ってきた。

「こんにちは。遅くなりました」

「あ、今ちょうど。ちょっといい？」

昨夜の余韻覚めやらず、櫻も千歳も今ひとつキレがない。あのライバルどうしがすっかり睦まじくなっているのは何故？ まして、業平が昨日どっちと過したか、なんてことはわかりよう筈がない。

「で、どうだった？ うまくいった？」

「あ、ええ、おかげ様で。でも今日来ないんですか・・・」

「心配ならいいわよ。会いたいでしょ？」

「おふみさんたらあ」

聞き耳を立ててはいたが、笑い声しか聞こえなかった。今や先行カップルで通る二人は、

「ま、こっちも内緒事項あることだし」

「何か新展開があったんでしょね。いずれ自分から話したくなるでしょうから、その時まで。フフ」

手の方が留守になりそうだが、ちゃんと動いている。職員というのはそういうものである。

総会に係る書類を封筒の中に詰め込むところまでは、午前中に終わることができた。続きの作業は午後から再開。封を閉じ、業者指定の宛名ラベルを貼り、引き取りを待つ、それだけ。今は四人が残り、館内でランチタイム。

「本当はもっと早く出したかったけど」

「季刊誌その他、前から予告はしてたんだから、いいんじゃないですか？」

「ま、あとはメールで一斉案内か・・・」

「じゃ例の送信方法で。ネ、隅田くん？」

「へ？ ああ、本人情報確認欄付き、のこと？」

「まだちょっとボーツとなっている千歳だった。すると」

「Bonjour!」

春らしい装いでモデルさんがやって来た。誰彼さんは声が出ない。櫻お手製のデリに手を伸ばしつつも、ポー。いや、beauと言いたいようである。

「あら、手伝いに来てくれたの？」

「絵画展のチラシ、一応作ってきたんで、もしよければ一緒に、と思って」

「蒼葉ちゃん、やるっ!」

「そっか、同封物・・・」

女性四人が集まれば賑やかになるのは至極当然。居心地は悪くないのだが、ここは女性どうして語らってもらうのがよかるっ。

「じゃ僕はメールの設定始めてますんで」

気を利かせて移動する。カウンターの隅っこに居る隅田くんである。

「この際、DPOの案内を同封しても良さそうだったが、

ふ「拡大版のメドが立ってからでもいいかな」

や「とりあえず、当日資料は用意します。初仕事として」

とのこと。あとは、

さ「まだQRコードはないけど」

ふ「せっかくまとめたんですもの」

「原版はカラーだが、今回はモノクロ。A3ヨコに広がるは先週の成果である。」

さ「ま、塗り絵として使ってもらうのもアリですね」

ふ」となると、グリーンもオレンジもないわねえ」

あ「そこは人それぞれでしょう。感覚、感性、感情……」

や「表題は？ いろいろマップ？」

さ「それにいきいきを足す」

あ「ひらがなで書くと、きいろ、って」

ふ「でも、グリーンとオレンジで共通する色ってもしかして黄色？」

話が尽きないので、とりあえずは表題なしで、その仮まとめマップは発送されることになった。

「封しないで置いて良かったですね」

「ま、こつこつのはできるだけ引き付けて、ってことなのよね。他にチラシとか、大丈夫かしら？」

「四月六日イベントは？」

文花を横目に弥生が一言。

「そつねえ…… クリーンアップは講座の一環だから一応案内出したけど、ステージの方よね」

「ま、あんまりお客さん増えちゃうとプレッシャーが……」

「あら、櫻さんらしくないわねえ」
「いえ、あんまし派手にやりたくないかな、って。音響関係も一部はお天気次第だつて言うし」

電気系統には、再生エネルギーを組み入れる予定ゆえ、音量にも制約が生じる見込み。それに見合った客数というのも自ずと控えめになる。だが、櫻はこれとは別の理由で、セーブをかげようとしていた。「彼女が演奏に集中してもらえるように、心置きなく旅立てるように……」

「それじゃ皆様、今日はどうもでしたっ！」

文花は発送前の箱々を前に、笑顔満面。

「残るは当日の段取り？ ですね。もうちよつと詰めないと
らしいことを述べるのはこの人、千歳である。」

「会員から立候補が出なければ、女性議長を立てる、あとはその人の仕切り次第ではあるけど……」

「って、おふみさんが？」

「まさか。事務局長はね、議案説明役なのよ。議長からのご指示で淡々と……」

「フーン」

「弥生ちゃん、勤務初日だけど来る？ 起業家としては設立総会って勉強になると思っけど」

「あ、ハイ！ でも、一応最高執行責任者COOと相談します」

議事の記録は新理事で交代しながら、議事録署名は代表が一筆入ればあとは一人か二人か、そんな話が少々。兎にも角にも、発送が済めばこっちのもの。あとは総会成立に必要な出席者、または書面参加が得られればいい。かくして総会までのカウントダウンが、始まる。

© renol ogger